

# 街のオアシス 再発見 第11回



## 広大な緑地抱える 緑ヶ丘公園(帯広市)

森林インストラクター

**小沢 信行** (おざわ のぶゆき)

十勝管内足寄町出身。1978年北海道新聞社に入社。記者として函館、釧路、小樽などで勤務。編集委員、論説委員などを勤め2017年退職。日本森林インストラクター協会会員。道新文化センターで樹木観察の講師を務める。著書に「こうしてできた北の銅像」。

広さ50<sup>ヘクタール</sup>を誇る帯広市の緑ヶ丘公園は十勝監獄（現帯広刑務所）の所有地でした。国から払い下げを受け1929年に開設します。池やかつてあったスキー場は、受刑者の手によってできたものです。

公園内には百年記念館、道立美術館といった文化拠点や、動物園、児童遊園などの子ども向けエリア、パークゴルフ場やテニスコートなどのスポーツ施設があります。

一方、「彫刻の径」や「どんぐりの径」を歩くと、平原の里の豊かな自然に触れることができます。



沿道に彫刻が並ぶ「彫刻の径」

### 助役発案の長大ベンチ

広い公園を象徴しているのが、8<sup>ヘクタール</sup>全面芝生のグリーンパークです。公園に隣接していた帯広刑務所が1976年に移転し、跡地は宅地と緑地になりました。宅地分譲は順調に進みますが、緑地はそのまま手つかずのグリーンパークとなります。

そんな折、ヨーロッパの視察旅行から帰った塚本帝<sup>つかもと きみ</sup>雄助役が、スイスで見た長いベンチを帯広でも作ってはと田本憲吾<sup>たもとけんご</sup>市長に提案します。これが「世界一のベンチ」誕生のきっかけです。

スイスにあった世界最長のベンチは全長126<sup>メートル</sup>。それを上回るため、グリーンパーク西側のカラマツ並木前に400<sup>メートル</sup>のベンチを造成する計画を立てました。

市は1981年度予算に560万円を計上し、組み立て作業は7月、大勢の市民がボランティアで行いました。作業に参加した発案者の塚本さんは「市民の手づくりで完成するところに意義がある。今までの市政のなかで、こんなにみんなが関心を持ち、賛同してくれたことはなかったかもしれない」（十勝毎日新聞1981年7月13日）と喜びをかみしめていました。

完成を祝う7月19日のフェスティバルでは、400<sup>メートル</sup>の仕掛け花火が点火され、ベンチの端から端まで火が走り、花火が打ち上がりました。この後、ベンチに一

齊に座った市民は1282人を数えました。

帯広のベンチはギネスブックに掲載され世界一になりましたが1989年、石川県富来町（現志賀町）の460個のベンチにその座を譲りました。でも、市民手づくりの「長大なベンチ」であることに今も変わりはありません。



市民が手作りした長大ベンチ

### 薄幸の歌人碑

児童会館の裏手、百年記念館へ続く歩道の脇に中城ふみ子の歌碑があります。帯広出身のふみ子は「薄幸の歌人」でした。結婚し4人の子を産みますが、1人は生後間もなく病死します。離婚後、乳がんを患い手術をするものの、再発し他へ転移します。

死を覚悟したふみ子は1954年、書きためた短歌を世に出そうと行動を起こします。一つは雑誌「短歌研究」（日本短歌社）が主催した第1回「50首応募作品」への挑戦です。未発表作50首をまとめて応募する企画で、1003通の中から最高の特選に選ばれ、同年4月号に発表されました。

もう一つは歌集の出版です。その序文を川端康成に依頼するため、手紙を添え歌稿を本人へ送ります。感

動した川端は序文を引き受けるとともに、何首かを雑誌「短歌」に載せてほしいと発行元の角川書店に依頼します。その結果、同年6月号に川端の推薦文とともに掲載されました。

全国的な短歌雑誌に相次いで取り上げられ、7月には歌集「乳房喪失」を出版したことで一躍時の人となります。しかし、それもつかの間、8月には入院先の札幌医科大学病院で亡くなります。31歳の若さでした。

この年、同大学に入学したのが作家の渡辺淳一さんです。後にふみ子の存在を知り、その生きざまを1975年、「冬の花火」という小説にします。

作品の中に、死の1カ月前、見舞いに駆け付けたわが子と別れるシーンがあります。「お母さん死んだりなんかしないわよ」と言うふみ子の目に涙があふれます。これが最期と察した11歳の長男と8歳の長女は泣きじゃくったまま何も言わず、祖父に手を引かれ帯広へ帰って行きます。

この記述の後に、ふみ子の歌「母を軸に子の駆けめぐる原の晝木の芽は近き林より匂ふ」が紹介され、「かつて子供達と過した日々が、鮮やかにふみ子の脳裏に甦ってくる」と書かれています。

公園の歌碑に刻まれているのはこの歌です。碑の背後には、歌を連想させるような林が広がっています。ふみ子の歌碑としては市内で2番目。1980年に結成した「中城ふみ子会」が中心となり募金を集め1983年8月、除幕式が行われました。

最初の歌碑は1960年8月、生前親交のあった人たちが帯広神社裏に建てました。記された歌は「冬の皴よせゐる海よ今少し生きて己れの無惨を見むか」。その後、老朽化のため1995年8月、近くの十勝護国神社西側に建て替えられました。



市内2カ所目の中城ふみ子の歌碑

### 冒険魂が詰まったドーム

公園の南にあるおびひろ動物園内にドーム型の施設「植村直己記念館」があります。

世界的な冒険家、植村さんは1976年、北極圏1万2千キ。単独犬ぞり旅行に同行したエスキモー犬2匹を動物園に寄贈。その後、何度も帯広を訪問し、犬ぞりレースに参加するなど市民との交流を深めてきました。

ところが、北米大陸最高峰マッキンリーの単独登頂に成功した翌日の1984年2月13日、消息不明となります。明治大学山岳部OB隊が救助に向かうものの、発見できず3月9日、捜索打ち切りが表明されました。

消えた植村さんを追うように同日、動物園で生き残っていたエスキモー犬の「イグルー」が息を引き取ります。関係者にとっては、二重の悲しみでした。

植村さんの精神を継承しようと1984年4月、「植村直己帯広会」が発足。市は功績を形にして残すため、動物園に記念館を建設し1985年1月、公子夫人を招いて開館式を行いました。

記念館はエスキモーの雪塊の家イグルーに似せた直径10<sup>メートル</sup>、高さ5<sup>メートル</sup>のドーム型の施設です。その中には、マッキンリーで捜索した際に見つかった遺留品やパネル写真、エスキモー犬イグルーのはく製なども展示されています。世界の極地で数々の偉業を達成した植村さんの偉大な冒険魂に触れることができます。



ドーム型の植村直己記念館

### 春告げる野草園

春の訪れを告げるのが、公園西側の道道沿いにある野草園です。5月になると、オオバナノエンレイソウ、シラネアオイ、ニリンソウなどが咲き誇ります。

中でも、訪れた人たちを圧倒するのが、敷地一面に広がるオオバナノエンレイソウです。ひし形を横に広げたような葉が3枚輪状に伸び、その中央部に3枚の花弁が開きます。葉に見劣りしない大きさから「大花延齡草」と書きます。

中をのぞくと、黄色いやくが付いた6個の雄しべが雌しべより長く伸びており、白い花のアクセントにもなっています。

種から開花までには長い年月が必要です。種子が落ちた後、発芽しても出る葉は1枚です。5、6年これを繰り返して、ようやく3枚の葉が出るようになります。そして、花を付けるにはさらに5、6年かかるといわれています。

主に北海道の沢沿いの林内に自生しており、広尾町野塚のシーサイドパークは国内最大規模の群生地として知られています。

これに対し、淡い紫色の花を咲かせるのがシラネアオイです。4枚の花弁のように見えるのはがく片で、花弁はありません。2個の雌しべが多数の黄色い雄しべに囲まれています。



群生するオオバナノエンレイソウ

北海道に多く、本州では中部以北の亜高山帯に自生しています。1科1属1種の日本特産種です。日光の白根山で発見され、花がアオイに似ていることから「白根葵」になったといわれています。

オオバナノエンレイソウのように群生はしていませんが、園内を歩き回っていると、美しい大輪が目にとまるはずですよ。



薄紫色の花が咲くシラネアオイ

### 縁起のいいカシワ

野草園の東隣に広がるのがカシワ林です。高木で枝葉が頭上にあるため、近くの歩道を歩いても気が付きません。

海岸付近や火山灰地など肥沃ではない場所で育つ生命力のある樹木です。かつてコメを炊いて盛り付けるのに使われたので、「炊ぐ葉」からカシワになったといわれています。

大きな葉の縁が波状になっているのが特徴です。紅葉の時期になると褐色になりますが、ほとんどが枝から落ちることなく春を迎えます。

子孫を絶やさない縁起のいい木であるとされ、5月5日の端午の節句には柏餅を食べる風習があります。葉が大きく餅を包むのに便利なほか、オイゲノールという成分が抗菌作用を発揮します。



高く成長したカシワ

同じ仲間のミズナラのドングリは網目模様の帽子(殻斗)をかぶっていますが、カシワの帽子は毛が反り返ったようなユニークな形をしています。

十勝管内では芽室町や幕別町などカシワを市町村の木にする自治体が目立ちます。帯広では柏林台という地名や、柏小、柏葉高という学校名にも使われており、いかに地域になじみのある樹木かが分かります。



形がユニークなカシワのドングリ